第六章　夜高行燈と曳山の構造

第一節　夜高行燈の構造

第一項　夜高行燈各部と用具の概説

夜高行事の行燈には大・中・小の種類があるが、いずれも基本的な構造は共通している。中・小の行燈は時代が下ってから大行燈をそのまま小型化することでできたものであり、本節では主に大行燈の構造について取り上げる。

大行燈は台（ダイ）・田楽（レンガク）・傘鉾（カサボコ）・吊物（ツリモン）・山車（ダシ）といった部分からできている。第一・二章で説明されるように夜高行燈の構造は時代とともに変遷を遂げているが、本章では現在の構造を説明する。

（一）台（ダイ）

台は行燈の最下部に位置する。欅の太い角材を組んだ大きな木枠で、台枠（ダイワク）などとも呼ばれる（写真1）。いわば、行燈の基礎の部分にあたる。台の最下部には、櫓状に加工した木材を履かせる。これを擦（ズリ）、擦木（ズリギ）などと呼ぶ。戦前までは行燈を担ぎつつもこの擦を利用して引きずって動かしていた。大正時代終わりから新町を皮切りに擦の後部内側に小さな鉄製の車輪を二輪取り付け、前部を少し浮かせながら押し引きして動かすようになったという。ただ、この車輪の取り付け時期については、戦後の昭和二四年（一九四九）頃に道路の舗装が進んだことで登場したという説もある。いずれにせよ、担いでいた頃に比べ、車輪のついた現在の台は各段に重く、かつ大型化している。

台の左右の上部には台棒（ダイボウ）と呼ばれる長さ八・二メートルほどもある長大な担ぎ棒を取り付ける。またこの台棒をしっかり固定するため、左右の台棒の間に長さ約二・二メートルの横棒（ヨコボウ）を一〇本程度（前に四～五本、後に四～五本）渡す。台棒や横棒は、番線やワイヤーで台にしっかりと固定され、その上に藁縄が施される。この作業を台締め（ダイジメ）という。藁縄で固定する際は縄目をきれいに揃えて巻き付け、時には水を掛けて締め上げる。そのためこの藁縄を化粧縄と呼ぶこともある。また、台の中心には高さ五メートルあまりの心木（芯木、芯棒とも書く）を垂直に挿し込む。心木を軸として山車・傘鉾・田楽を固定するため、心木の固定がゆるいと上部が不安定化してしまう。

（二）田楽（レンガク）

台の上に取り付けられるのが田楽である（写真2）。田楽は、高さ二メートルほどもある扁平な直方体の角行燈で、かつては五月一日に福野神明社で行われる献燈式でいただいた火を明かりとして蝋燭に灯したため、御神燈と呼ばれることもある。田楽は、正面に極彩色の武者絵が描

1. 組み立て中の台（上町）

2. 取り付け前の田楽（辰巳町）

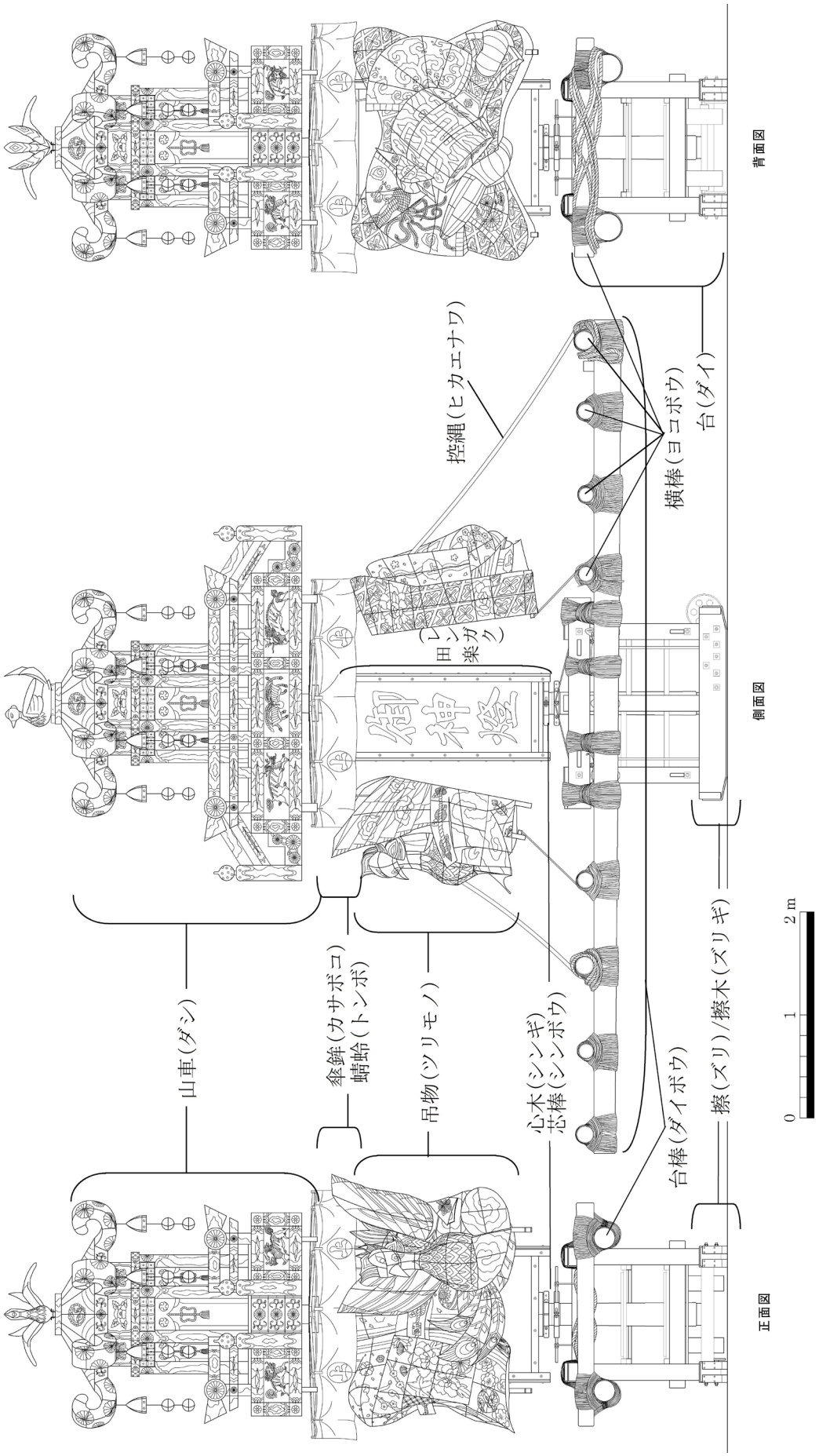

図 1. 夜高行燈の立面図と各部の名称（上町）

かれ、背面には嘉字、向かって左面には「御神燈」、向かって右面には「〇〇町氏子」（〇〇〇は町内名）と墨書される。この巨大な田楽を、台の上に垂直に立てた心木に挿し込む。

田楽は、引き合いの際も暗黙の了解で壊していけないことになっている。そのため、時折文字が書き直される以外は手を入れられることも少なく、何十年にもわたって基本構造は変わっていない。何らかの事情で破損した時や、町内で何か特別な祈願や慶事のあったときなど、数十年に一度作り替える程度である。田楽に対するこうした扱いは、後述するように田楽が行燈の心臓部であることを如実に物語っている。行燈は田楽を核としながら大型化・複雑化してきたという斉藤五郎平や宇野通、佐伯安一らの説を裏付けるものといえる（斉藤一九八〇、宇野一九九七、佐伯二〇〇〇）。

（三）傘鉾（カサボコ）

田楽のさらに上に取り付けられる、丸く幕を巡らした部分が傘鉾である（写真3）。構造としては、竹で作成された骨組みの「蜻蛉（トンボ／ドンボ）」に、各町内の意匠が描かれた幕を巡らした形となっている。

（四）吊物（ツリモン）

傘鉾の前後に吊り下げられるのが吊物である（写真4・5）。吊物は、天女、孔雀、小槌、鳳凰、軍配、熨斗、米俵、獅子に牡丹など縁起の良い意匠の作り物である。行燈の見栄えの良し悪しに直結してくるため、製作には特に力が入る。前年の和紙を剥がした後、竹や木、針金などで骨組みを修理・新調し、その内部に配線をし、再び厚めの五箇山和紙を貼って丁寧に彩色して作る。このとき和紙は刃物で切ってはならない。彩色では、まず溶かした蝋やパラフィンで絵の輪郭や線、人物の目、字の輪郭などを描く。この作業を蝋引きといい、彩色で色の混ざるのを防ぐ効果もある。次いで赤をはじめ、薄赤（ピンク）、緑、青、黄、紫などに色付けする。色付けは、「紅（ベニ）入れ」と称され、ベニ、すなわち赤を基調とし、ボカシと呼ぶ薄赤（ピンク）を適宜使うなどする。こうしてできた吊物は、蝋引きしていることもあって中で明かりを灯すと独特の妖しげな光を放つことになる。吊物は、引き合いで壊されるため、毎年新しいものに作り替えることがほとんどである。また、その際意匠変更することもしばしばみられ、昔に比べるとより大型化・立体化する傾向にある。

（五）山車（ダシ）

傘鉾の頂部に載せるのが山車である（写真6）。山車もまた、吊物と同じ方法で作られる巨大な作り物で、行燈の見栄えの良し悪しに直結してくるため製作に力が入る。御所車、宝船、神輿、城、花鳥、高御座（たかみくら）などの意匠がみられる。これらもまた引き合いで壊されることが少なくな

3. 取り付け前の傘鉾（横町）

4. 前側から見た吊物（浦町）

い。そのため、破損個所のみを補修することもあれば、新しいものに作り替えることもある。かつては意匠自体も頻繁に変えていたといわれ、昭和四〇年（一九六五）前後までは桃太郎や凱旋門、金閣寺などを作ったことまであった。しかし、近年意匠は固定化される傾向にある。三田村佳子も指摘するように、現在の意匠には総じて神の乗物・住処としての意識が反映されているようである（三田村二〇二一）。なお、傘鉾と山車の間にある部材を特に座布団（ザブトン）と呼ぶこともある。

（六）全体の構造

吊物や山車は、かつて蝋燭の火で明かりを灯していたが、引き合いの時などに引火して燃えてしまうことも多かったことから、戦後は徐々に豆電球へと変わり、近年はＬＥＤを使う吊物や山車もみられるようになってきている。

こうして完成した大行燈は、高さ七メートル近くにもなる。大行燈が現在の高さになったのは、明治時代以降のことである。明治二五年（一八九二）に電灯線が張られたことを契機に翌二六年から二丈五尺（約七・六メートル）以下と規制され、さらに明治二九年には台棒の長さを三間（約五・五メートル）以下、横棒の長さを六尺（約一・八メートル）以下、行燈の高さを二丈四尺（約七・三メートル）以下とし、明治四三年（一九一〇）には高さ二丈一尺（約六・四メートル）以下に規制されて現在に至っている。現在でも架線ギリギリの高さであるため、山車の横に乗った若衆が適宜架線を避けながら練り廻す。なお、架線以前は七メートルを優に超える大行燈もみられたようで、文久年間（一八六一～一八六四）には高さ三丈六尺（約一〇・九メートル）もの大行燈が作られたとも伝えられている（写真7）。当時は暗闇を巡行する行燈を、福野の町並みの屋根越しに遠望できたと言い伝えられており、「夜に高く聳える作り物」ということで、ヨタカと呼ばれ、「夜高」の字も充てられるようになったとされる。

第二項　各町の夜高行燈

（一）横町の行燈

横町は、現在、大行燈一本、小行燈二本の計三本を練り廻している。大行燈をみると、山車は大黒、吊物は前が軍配、後が鶴亀となっている。全体的に赤色のほか、青色も比較的多く用いられており、正面から見たときに山車の一部である鳳凰の大きな影ができるのが特徴的である。

（二）上町の行燈

上町は、現在、大行燈一本、小行燈一本の計二本をだす。大行燈をみると、山車は高御座、吊物は前が鳳凰と唐衣、後が打ち出の小槌・扇子である。

（三）七津屋の行燈

5. 後側から見た吊物（新町）

6. 取り付け前の山車（御蔵町）

七津屋は、現在、大行燈一本、中行燈一本、小行燈二本の計四本をだす。大行燈をみると、山車は屋形船、吊物は前が羽衣、後が恵比寿である。他町内より一回り大きな吊物が特徴的である。また山車は、船鉾型の曳山をモチーフとしている。

（四）新町の行燈

新町は、現在、大行燈一本、小行燈一本の計二本をだす。大行燈をみると、山車は神輿、吊物は前が冠大幣鏡、後が三種（みくさ）の神器（かむだから）である。骨組みに青竹を比較的多く使うのが特徴的である。

（五）浦町の行燈

浦町は、現在、大行燈一本、小行燈二本の計三本をだす。大行燈をみると、山車は御所車、吊物は前が火炎太鼓、後が熨斗で、熨斗の田楽側には風神・雷神が描かれている。繊細な蝋引きと薄青を比較的多く使った色合いが特徴的である。

7. 復元された「文久の大行燈」

（六）辰巳町の行燈

辰巳町は、現在、大行燈一本、小行燈一本の計二本をだす。大行燈をみると、山車は宝船、吊物は前が軍配、後が巾着である。赤系の色を多用するところに特徴がある。

（七）御蔵町の行燈

御蔵町は、現在、大行燈一本、小行燈一本の計二本をだす。大行燈をみると、山車は花車、吊物は前が鳳凰、後が素戔嗚である。